



特集

花のある建築

時の有力者の住まいをいっそう華やかにした庭園、自然をモチーフにした装飾で建築を彩ったアールヌーヴォー建築、万国博覧会の温室施設としてガラスと鉄の画期的な建築として歴史に名を残したクリスタルパレスなど、時代ごとに花と建築はさまざまな関わりをみせてきました。そして、地球環境問題が深刻になる現代では、花を含めた自然の在り方を都市や建物に取り入れていこうという動きが出てきています。

本号では「花のある建築」をテーマに、2027年に横浜で開幕するGREEN×EXPO 2027や植物園、歴史的な建築などについて取り上げていきます。



上：装飾宮殿
（ケチケメート）
©小谷匡宏
中：マジョリカ・ハウス
（ウィーン）
下：太原植物園
（中国・太原市）
©CreatAR



GREEN×EXPO 2027会場イメージパース 画像提供：(公社)2027年国際園芸博覧会協会

自然と人と社会が共に生きるための 解決策を考える GREEN×EXPO 2027

Interview

脇坂隆一

(公社)2027年国際園芸博覧会協会 推進戦略室長



Ryuichi Wakisaka

1994年東京大学農学部卒業。同年建設省入省。国営ひたち海浜公園、青森市役所、東北国営公園事務所勤務を経て、2017年都市局公園緑地・景観課国際緑地環境対策官として国際園芸博覧会に携わる。2022年より現職。国際園芸博覧会においては、2019年中国・北京、2022年オランダ・アルメーレ、2023年カタール・ドーハの博覧会の日本国出展を担当し、GREEN×EXPO 2027は横浜市の誘致段階から携わってきた。



国営ひたち海浜公園

気候変動に伴う災害の激甚化を背景に、自然環境が有する多様な機能を持続可能な都市づくりに生かす「グリーンインフラ」への注目度が高まる中、2027年3月より37年ぶりの国内開催となるA1クラスの国際園芸博覧会「GREEN×EXPO 2027」が横浜市で開催されます。同博覧会のテーマや会場計画、見どころなどについて、(公社)2027年国際園芸博覧会協会推進戦略室長の脇坂隆一氏に話をうかがいました。

危機的な地球環境の中で 明日の幸せをどう創るか

—GREEN×EXPO 2027の開催まであと1年となりました。今回のEXPOでは「幸せを創る明日の風景」がテーマになっており、テーマの背景にあるキーワードとして「プラネタリー・バウンダリー」という言葉も聞かれています。プラネタリー・バウンダリーとは何を指すのでしょうか。

脇坂：プラネタリー・バウンダリーは、2009年にスウェーデンのヨハン・ロックストローム博士によって提唱された概念で、人々が地球上で持続的に生存していくために守るべき境界線を示したものです。気候変動、海洋酸性化など9つの指標があり、2023年の発表ではそのうち6つの指標が安全圏を超過したとされています。このように明日の地球を案じる悲観的な状況の中で、産業界も含めてエコ・フレンドリーや温室効果ガスの削減などに取り組んでいるわけですが、そのような中で幸せをどう創るのか。それを問うのが今回のEXPOであり、EXPOとプラネタリー・バウンダリーの考え方をつなぐのが「幸せを創る明日の風景」というテーマともいえます。

EXPOにおけるテーマの意義について補足すると、1970年大阪万博では「人類の進歩と調和」、1990年大阪の花の万博では「自然と人間との共生」がテーマに掲げられていましたが、1994年のBIE（博覧会国際事務局）総会決議でEXPOは「人類社会の課題解決の場」と再定義されました。課題を反映したテーマを持つこと、そのテーマに対するソリューションを示すのが21世紀のEXPOだという考え方になったのです。その先駆けといえるEXPOが、「自然の叡智」をテーマに掲げた2005年の愛・地球博でした。

今回のGREEN×EXPO 2027も、地球環境問題がベースにある中で「幸せを創る明日の風景」を実現するためにどのようなソリューションを考えるのか、それを全出展者が示していくという場となります。

——テーマに対する考えを出展者が示していく場ということですね。

脇坂：博覧会協会は主催者ですが、あくまでオーガナイザーの立場で、主役はそれぞれの持ち味を出される出展者となります。現在、少しずつ出展内容が公表されており、一部をご紹介しますと、「花・緑出展」に参加する(株)石勝エクステリア(東急不動産グループ)では、造園技術とネイチャー・ベースド・ソリューション(NbS)^{*}による暑熱対策、(株)サカタのタネではタネの不思議や面白さ、タネから育てる植物の魅力を伝える展示が行われることが発表されました。「幸せを創る明日の風景」のテーマのもと、多彩な出展者によるさまざまな展示がみられると思います。

^{*}NbS：Nature-based Solutions。健全な自然生態系が有する機能を活かして社会課題の解決を図ること

跡地のまちづくりと博覧会の会場計画をセットで進める

——会場となる旧上瀬谷^{かみせや}通信施設跡地は、2015年に返還された米軍施設跡地です。EXPOの後は、横浜市の防災公園として使用されるそうですね。敷地計画はどのように行われたのでしょうか。

脇坂：EXPOの会場として使用するのは、跡地の南側1/3にあたる土地です。敷地の東側にはゴルフ場、南側には県営住宅があり、相沢川と和泉川の2つの川が流れ

国際博覧会

BIE「博覧会国際事務局(政府加盟)」登録・認定

BIE：「国際博覧会に関する条約」に基づき加盟国の拠出金によって運営されている組織。

登録博(旧一般博)	認定博(旧特別博)
1970 日本万国博覧会 「大阪万博」	1975 沖縄国際海洋博覧会 「沖縄海洋博」
2005 2005年日本国際博覧会 「愛知万博」	1985 国際科学技術博覧会 「つくば万博」
2025 2025年日本国際博覧会 「大阪・関西万博」	

国際園芸博覧会

AIPH「国際園芸家協会(民間団体等加盟)」承認

AIPH：国際的レベルで園芸生産者の利益を図り、園芸技術の向上を図るために設立された非営利団体。

種別	A1	B	C	D
名称	世界国際博覧会	国際園芸博覧会	国際園芸展	国際園芸見本市
開催期間	3～6か月	3～6か月	4～30日間	—
最低面積	50ha	25ha	0.6ha	—
BIE承認	必要	—	—	—

1990 国際花と緑の博覧会「大阪花の万博」

2000 国際園芸・造園博覧会「ジャパンフローラ淡路」

2004 静岡国際園芸博覧会「ジャパンフローラ浜松」

2027 2027年国際園芸博覧会「GREEN×EXPO 2027」

出典：(公社)2027年国際園芸博覧会協会発行「2027年国際園芸博覧会基本計画」(2023年1月)